

|             |   |
|-------------|---|
| Title       | フィアカントの社會學論(二)  |
| Author(s)   | 米田, 庄太郎   |
| Citation    | 經濟論叢 (1924), 19(3): 328-344   |
| Issue Date  | 1924-09-01  |
| URL         | <a href="http://dx.doi.org/10.14989/128204">http://dx.doi.org/10.14989/128204</a> |
| Right       |   |
| Type        | Departmental Bulletin Paper   |
| Textversion | publisher   |

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 三 號      第 十 九 卷

大正三十一年九月一日發行

## 論 叢

世界の貨幣交通……………法學士 作田 莊一

フィアカントの社會學論……………文學博士 米田庄太郎

海運會社の保護と海運同盟の監督……………法學士 小島昌太郎

## 時 論

奢侈課税としての關稅……………法學博士 神戸 正雄

## 說 苑

宗教と社會主義との關係……………法學博士 財部 靜治

獨逸の國內植民事業……………法學博士 河田 嗣郎

## 雜 錄

漁船の遭難に就て……………經濟學士 蜷川 虎三

爲替の逆調による輸出増加に就て……………經濟學士 小川福太郎

統計的計數……………經濟學士 岡崎 文規

## フイアカントの社會學論（二）

米田庄太郎

### 二「文化變動に於ける恒定性」に於ける

#### 形式社會學の概念に就て

さきに述べし如く、フイアカント氏自身の言述によれば本書は形式社會學上からの社會形式、即ち文化變動に於ける恒定性と云ふ一社會形式を論究するものにして、形式社會學の發生に對して一貢獻をなせるものである。而して現に本書の副題名は「一社會學的研究」(Eine soziologische Studie)となつて居る。されば同氏自身の言述から察すると、同氏は本書を著述する際に形式社會學の概念を立て、居られたと考へねばならぬ。しかも同氏は形式社會學の始源及び發生を論ずるに當つて、同氏の著作論文中本書を舉げて居られるだけであるのを見ると、本書以前の同氏の著作論文中には、形式社會學の概念を論じたもの、ないことを、暗に認められて居ると推察される。されば本書の何處かに同氏の形式社會學の概念は、何等かの形にて説述されて居るであらうと推察されるのである。然るに本書を詳しく調べて見ても、同氏は何處にも形式社會學の概

念を、明白に論述して居ない。

本書は緒言、序論、(I) 歴史的部門、(II) 心理學的部門、意識の歴史的構造、(III) 社會學的部門、文化變動の機制、結論、補遺等から成立して居る。併し社會學の概念に關する同氏の直接の言述は、只緒言中に見出される左の二つの簡單なるものだけである。

「著者は文化變動の機制を論述すると同時に、一の具體的問題に就て、如何に社會學は廣い經驗的基礎に於て、組織的學科の仕方で一の特殊科學に形成され得るかを示したいと思ふ。」

「社會學者は一定の粗雜な考案を立て、歴史家は之を事實に照らして檢査し、修正されたる形態に於て立案者に送り返す。そこで社會學者は更に之を一層精練されたる形式に於て呈出する。此くて此處に一の連續せる交換作用が行なはれ、而して其の交換作用は確かに一の無限的な過程に於て、其の考案を益々現實態の豊富に近づかせ、益々完全に形成するのである。」

右の言述によりてフイアカント氏は、本書を公にする前に既に社會學を「經驗的に研究される一の特殊科學」と考へて居た事は明らかである。而して又同氏が後に論じて居る如く、文化變動に於ける恒定性」を以て一の社會形式と見るに於ては、本書は明らかに特に形式社會學の一問題を詳論するものと認め得られるのである。併し此頃同氏は既に社會生活の形式と内容とを概念的一般的に明確に區別して考へて居たかは疑問である。さきに述べし如く社會生活の形式と内容

この區別は、同氏は既に「自然人民と文化人民」の中に少しく論じて居る。併し夫れは後に發達せる同氏の形式社會學の概念に於けるが如き、方法論上最も根本的な意義を有するものとは考へられて居ない。而して本書「文化變動に於ける恒定性」の何處にも、社會生活の形式と内容との概念的區別は論じられて居ない。要するにフイアカント氏は、本書に於てもまだ右の概念的區別を明確に樹立して居ない、殊に其の社會學方法論上の根本的意義を明らかに意識して居ないと思はれる。隨ふて同氏が本書を著述せる當時の精神に於ては、本書を形式社會學上の一著作と意識して居たとは思はれないのである。

尙ほ此處に特に注意す可きは、本書に於ては同氏は文化變動に於ける恒定性の原理を、一の經驗的法則と稱して居るが、併し何處にも之を社會生活の一形式とは稱して居ないことである。本書を公にせる當時の同氏の精神に於ては、文化變動に於ける恒定性は、一の經驗的法則と考へられて居たので、まだ社會生活の一形式とは考へられ居ないのである。更に注意す可き點がある。余の察する處によれば、同氏が社會生活の形式と内容とを概念的一般的に明確に區別して考へ、又此の區別を社會學方法論上の根本的一原理と見るに至つたのは、ジムメルの影響によるのである。即ち同氏はジムメルから學んで右の見解を確立するに至つたのである。是れは同氏の著書論文諸處に於て、同氏が形式社會學の概念の始源を論ぜられる場合の同氏自身の言述によりて、

明らかに察知されるのである。然るに本書中同氏は何處にもジムメルの名を擧げて居ない。又本書中に引用されて居る多數の著書論文中ジムメルの著書論文は一も擧げられて居ない。是れによりて考へると、同氏は本書を著述せる當時に於ては、まだジムメルの著書論文を讀んで居なかつたと思はれる。少なくともジムメルの社會學論は全く知らなかつたかと思はれるのである。

以上論じ來れる處を總括して考へると、同氏が後に形式社會學の始源を論ずる場合に、本書「文化變動に於ける恒定性」を其の中に擧げられて居るのは、同氏の後の社會學論上から考へて、文化變動に於ける恒定性は偶々社會生活の一形式と見做し得られると云ふ點から見ての事であつて、本書著述の當時に於て同氏は既に形式社會學の概念を立て、居て、そうして其概念から見えて意識的に形式社會學上の一問題を捕へ、之を詳しく論究して以て形式社會學の誕生を資けるとか、或は其の發達を圖るとか云ふ主旨で、本書を著述されたと云ふ意味ではないと推斷せねばならぬ。要するに本書著述の當時に於ては、同氏は既に經驗的に研究される特殊科學としての社會學の概念を確立されて居たことは明白であるが、併しまだ其の對象を社會形式と見る形式社會學の概念には達して居なかつたのである。かくてさきに述べし如く、同氏の最も圓熟せる社會學概念の三要素中、同氏が先づ最も早く確立されたのは、經驗的に研究される特殊科學としての社會學の概念であつて、夫れより同氏は次に社會形式を對象とするものとしての形式社會學の概

念に達し、更に最後に現象學的方法を根本的に重要視する見解に達したのである。それで余は次に同氏が經驗的な特殊科學として社會學論を組織的に概論すると同時に、社會形式を對象とするものとしての形式社會學の概念を始めて明白に論述された論文にして、「文化變動に於ける恒定性」の翌年即ち千九百九年「社會學月刊雜誌」に公にされた「經驗的に研究される特殊科學としての社會學」を考察することとする。

併し夫れに先だち、「文化變動に於ける恒定性」に就て、尙は少しく述べて置きたいことがある。夫れは同氏が本書の補遺として、社會學の研究法に關して論述して居ることに就てである。今同氏が此處に特に文化變動に於ける恒定性の研究に關して論述して居る處によると、社會學の問題を詳しく論究するに當つて特に重要視する可き方法は三つある。一は比較法にして、二は大量觀察法（Die Method der Massenbeobachtung）、三は心理學的方法である。先づ比較法は歴史的資料から比較によりて普遍的或は共通的なるものを抽出せんとするものである。其の前定として肝要なるは充分なる歴史的資料である。然るに今日までは重要な社會學の諸問題、例へば文化變動に於ける恒定性の如き問題に關して、一般に其の歴史的資料が充分に蒐集されて居ない。されば驗經的な特殊科學としての社會學が健實に發達する爲めには、歴史的資料の蒐集及び研究が甚だ肝要である。次に大量觀察法は比較的に狭き空間的範圍の文化統一體、かくて一方に

於ては自然人民に關して、他方に於ては西歐並に東歐に於けるまだ處女的な田舎地域に關して適用される。此處に觀察者は文化變動の機制、指導的個人の意義、文化輸入の影響、變動の速度、文化受容の仕方等を、長年月を通じて注意深く觀察しなければならぬ。終りに心理學的方法に於ては、一方に於ては實驗的方法、他方に於ては例へば言述の心理學 (die Psychologie der Aussage) に於て用ひられるが如き仕方にて大量觀察法が肝要である。此處に個人が新しき或物を成就する心理的過程、及び時間の關係が一の重要な役目を演ずる心理的過程、例へば忘れられた或物を回想することや、新しき狀態に於ける適應或は創始などの過程等が、資料を與へるであらう。殊に大量觀察に對しては、兒童心意の發達が其の適用に有益なる領域を呈供するであらう。

今フイアカント氏が本書に於て社會學の研究上、右に述べしが如き研究方法を重要視されて居ることや、又本書全體に通じて現はれる同氏の研究精神から考へると、本書に於ける同氏の社會學の概念は、經驗的に研究される特殊科學としての方面を特に強調するものにして、其の對象が社會生活の形式であるが、又は内容であるかと云ふ問題には、殆んど全く注意を拂ふて居ないと思はれるのである。尙ほ又右に述べ來りし處によりて知られる如く、フイアカント氏は本書を公にされた頃にも、社會學の根本的方法として現象學的方法を重要視する見解を、まだ確立して居



なかつたのである。

### 三「經驗的に研究される特殊學としての社會學」

此論文の發表された「社會學月刊雜誌」は、千九百九年一ケ年間發行されただけで、翌年から  
は Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik に合併されたので、今日之を手に入れることは  
甚だ困難であるから、余は我國の社會學研究者の便宜を圖る爲めに、此處に此の論文に就て稍々  
詳しく述べて置く。

#### (A) 社會學の對象及び任務

社會學の發達は今や一の決定的轉回點に到達したと思はれる。社會學は今や一の哲學的學科か  
ら、一の特殊學に發達せんとして居るのである。而して此の特殊學の問題は既に根本的には決定  
されて居るので、今主要なる仕事となつて居るのは、此の新學科の爲めに適當なる方法を見出す  
ことである。此等の主張を確立せんとするは、即ち本論文の目的である。

此處に社會學の任務に關する諸見解の概觀から出發することが、有益であると思ふ。而して最  
とも廣い方針をも看過しない爲めに、先づ社會學的考へ方と社會學的學とを區別することが肝要  
である。但し社會學的考へ方と云ふは、社會學的に事物を考察することに興味を有する總ての人

々に共通する最小點と見做し得られるもので、其の本質はつまり環境の重大なる影響を理解せんとする事にあるのである。而して夫れは常に個人が其の環境に依存する事を究明せんとするだけでなく、更に種々なる文化財が相互に依存すること、及び各文化財が文化體系の全文化狀態に依存すること等をも究明せんとするのである。

余輩は此處に考察の範圍を狭め、只學としての社會學を考察するに止めるが、尙ほ此の場合にも第一に人種解剖學、人種生物學及び人種衛生學 (Rassenanatomie, biologie und-hygiene) を除外せねばならぬ。夫れは全く特殊な種類の問題及び方法を取扱ふもの、随ふて又一の獨立なる學である。而して其の學は寧ろ社會的人類學 (Sozialanthropologie) と稱せらる可きである。第二に余輩は倫理學、經濟學及び政治學等の問題に於ける社會學の應用をも除外する。是れ此等の場合に於ては應用社會學が取扱はれて居るのであるが、然るに余輩は此處に純正社會學或は純理論社會學の任務を確定せんとするからである。

以上述べしが如くに狭められたる社會學の範域内に入る總てのものは、今や社會學の任務に關する三つの相異なる見解の一に於て整頓され得る。第一に人々は社會學を、人間生活の身體的方面か、又は精神的方面か、又は文化的方面かを専ら研究する一定の諸學科の一定の諸部分の百科全書の一種と解し得る。此の見解は通俗的叙説や雜誌の發行及び學會の設立等には、有益であ

り得る。是れ此の見解は一般に、其等の場合に對して存在し得る學的共同性の最大限を示すからである。

第二の見解は社會學を一の社會哲學と見る。夫れによれば社會、文化及び歴史の哲學的諸問題が、社會學の對象となる。所謂歴史哲學の大部分、殊に歴史的生活の發達或は因果性の法則を確立せんとする一切の努力は之れに屬する。他方に於ては、經濟と法律との關係に關するシタムラーの深奥なる著作は、此の範域に於ける認識論的研究の一模範である。

終りに第三の見解は、社會學を一の特殊學と見る。既にツェルクムは此の見地に立つて居る。

併し彼が此の見解に基いて社會學的問題の一例として取扱へる問題、即ち近世西歐文化國に於ける自殺の現象は、此處に述ぶる社會學の概念に従へば、社會學に屬し得ないものである。而してかゝる特殊學の任務を確定したと云ふ名譽は、先づ第一にジメルに歸するのである。テーニスも亦本質的には同一の見解を述べて居る。（フィアカント氏は最近の論文や著作に於ては、タールドをも同氏の社會學概念の先覺者の一人に舉げて居るが、此の論文に於ては、其の中にタールドの名を舉げて居ない。多分同氏は此の論文を書かれた時分には、まだよくタールドの眞意を理解して居なかつたのであらう。實際に於てタールドはジメルやツェルクムよりも以前に、純正社會學の概念を確立して居たので、又種々の點に於て、フィアカント氏の純正社會學の概念に類

似する余の純正社會學の概念は、タールドから出發して、同氏に先だちて余が立てゝ居たものである。(此處に其等諸家の所説の主旨を、稍々自由に云ひ表はせば左の如くである。即ち社會學の一般の問題となるものは、諸個人の間の心的關係である。一層詳しく云へば、種々なる個人に於て行なはれる心的過程が、相互に衝突し、又夫れによりて相互に影響される仕方が、社會學の一般の問題である。尙ほ此處に問題の二部類が區別される。一はより多く過程及び關係其物に關するもの、他はより多く其等の過程及び關係の永續的結果に關するものである。かくて一は右の關係をより多く作働的見地の下に呈出し、他は之をより多く實體的見地の下に呈出する。問題の第一部類にありては、諸個人の間<sup>の</sup>心的關係が取扱はれるので、其等の關係とは例へば一方に於ては競争、鬭爭、會議、結婚等の如きもの、又他方に於ては摸倣、共鳴、孤獨等の如きものである。此處では社會學の任務は其等の心的關係の種々なる類型を確定し、其の特質を究め、又其等の類型の原因及び夫れより生ずる結果を研究することである。

問題の第二部類は、全體精神<sup>ゾグンツガイスト</sup>及び其の生産物に關するものである。此處に余輩の全體精神と云ふは、全體と共に又、團體内に於ける共同的意識現象或は過程の夫れ自身に於て結合する個別的體系の各々をも意味する。かくて此處には意志現象及び感情現象や、確信や、愛情や、記憶及び知覺などが取扱はれ得るのである。只此の際左の條件が加はるを要す。即ち其等の内容が團體に

よりて因果的に影響されると云ふことである。吾人は更に全體精神の主觀的形式と客觀的形式とを區別し得る。前者は考察される個人の心的生活以上に出でないものにして、例へば團體精神コンスガイテの總ての種類の如きものである。而して後者にありては、先づ第一に堅固なる團結體にして、其の活動が外部的構成物に於て表現するが如きもの、例へば最と多くの組合や協會、教會或は國家なぞの如きものが取扱はれる。併し第二には文化財の總體、例へば慣習、法律、技術、一定の藝術様式、一定の世界觀等の如きものが取扱はれる。各個人の創造は、只夫れが全體に受け容れられ、永續的に尊重され、修養されると云ふことによりてのみ、一の文化財となり得るので、かくて文化財に於ては、常に一般的意識内容が現存するのである。

余輩は云ふまでもなく全體精神の現象に對する社會學の任務を、各個別的特殊的全體精神の現實的記述に於て認めんとするのでない。かゝる現實的記述の任務は寧ろ一方に於ては文化史及び俗史に屬し、他方に於ては記述心理學の特殊的部門に屬する。社會學は此處にも先づ、全體精神の諸類型を比較法によりて確定し、特質附けねばならぬ。此の際特に例へば個人と全體精神との關係の如きもの、殊に後者が前者に許す自由の度合の如きものを研究することが肝要である。又例へば口傳的文化財と文書的に固定されたる文化財との反對、民謡の絶へず變化し易き性質と印刷に附せられたる藝術的詩歌の固定的傳承なども重要な問題である。かくて更に甚だ重要な

一問題部類が存在する。夫れは文化財及び一般に各全體精神の生起、持續及び變動等の機制に關するものである。

以上述べしことからして、余輩は社會學の任務が心理學の任務から明らかに又鋭く分離されることは、既に明らかであることを望む。是れ心理學にありては、研究さる可き現象或は過程の領域は、個人心生活の限界内に包含されて居るからである。但し人々が此の前提の中に、如何に大なる抽象が含まれて居るかを意識することは稀である。嘗に現實が絶へず其の反對を吾人に示すのみならず、又一切の精神科學は反對の前提から出發して居る。さはれ人間の心的生活を外部的影響に依存するがまゝに、根本的な或は組織的な研究の對象となすは、今や生成しつゝある只二つの學あるのみである。其の一は人類地理學 (Anthropogeographie) にして、夫れは周圍の自然に人民の依存すること、周圍の自然が人口密度、定住關係、交通及び經濟、最後に又全文化の上に及ぼす影響を研究するものである。其の二はまさしく社會學である。社會學は要するに各個人に於て行なはれる種々なる心的因果系列の交叉、或は一團體内の種々なる個人の組み合わせを研究す可きものと云ひ得られる。かくて吾人は社會學を、個人心と個人心との間の因果の學として定義することが出来る。而して此の定義は、社會とは相互に相互作用の關係に立つ人々の總ての結合を意味すると云ふ、よく知られて居る社會の定義と一致するであらう。

却說以上述べ來りし如く、社會學の任務に關する第三の見解は、社會學を一の特殊學となさんとするものである。併し此の見解は他の二つの見解を、無用視せんとするのでない。夫れは只他の二つの見解と並び存し、又確かに大なる部分に於て其の上に立たんとするだけである。而して第三見解が右の優位を要求するのは、夫れは特殊學の性質に従ひ、多方面的展開に最も豊富なる眺望を開くと云ふ理由による。同様に夫れは社會學の學的現狀の全體、内部的諸傾向が特殊學への其の發達を迫まると云ふことを理由となし得る。社會學的問題の構想的取扱ひ、殊に舊歴史哲學が屢々企だてしが如きものは、常に失敗した。是れかゝる取扱ひはあまりに高く飛び上つたからである。夫れは其の材料に只ほんの概觀を投するだけで、直ちに發達及び因果の一般的法則を樹立せんとしたのである。然るに今日では、自然科學は既に吾人に左の事實を教へて居る。即ち各科學は其の材料を最も單純な要素に分析し得るほど、愈々眞實なる法則發見の理想に近づくこと云ふ事である。此くて余輩は文化、歴史及び社會の現象の機制を詳しく研究する以前に、隨ふて此處に問題とする結合及び關係を、歴史的社會的生活の全體から引き出し、人爲的に切り離し、出來るだけ單純なる要素に分析する以前に、敢て其等の現象の眞髓を深く究明せんとは企だてないであらう。而して夫れがまさしく、特殊學としての社會學の目標であるのである。

(B) 社會學の方法

社會學の任務は今や特殊學に發達することであるとすれば、夫れが爲めに新しき方法が必要となる。併し新しき方法は在來の舊方法を全く排斥して、之れに取り代はる可きでなく、補充的に之れと併用さる可きである。而して在來の舊方法に就て、吾人は殊に二つを區別し得る。其の一は概念的論究の方法にして、一方に於ては舊歴史哲學の辨證的構想ダイアレクティブ・センセントラル・テオリーが之れに屬し、他方に於てはシュタムラー派の認識論的研究が之れに屬する。其の二は日常生活の觀察（自己觀察を含む）及び一般的な歴史的知識に基づいて行なはれるものである。夫れは一方に於ては、與へられたる材料から命題或は判定を引き出すので、一部分歸納法を用いるもの、而して他方に於ては類型の設定及び其の中に個別現象を攝取することを主とするものである。此の第二の方法は從來の方法中最も重要なものにして、最も立派な結果を生ず可きものである。吾人はジムメル、タールド、テーンニス等の著作によりて、此の事を學ぶのである。併し此方法の作業能力には限界がある。此の方法は比較的複雑なる事實及び構成物以上には進むを得ず、深き分析に進入し得ないのである。而して此の障壁は只新しき方法の構成によりてのみ、打破され得るのである。

今其の新しき方法は如何にして構成さる可きやと云ふ問題に就て、吾人に解決の指示を與へ得るものは、心理學の發達である。心理學の發達は一般に社會學の發達と一の内部的親縁を有す



る。而して哲學的學科から一の特殊學への轉移と云ふ今日社會學にとりて最も重大なる仕事は、社會學に先だちて既に心理學の成就せるものである。心理學の舊方法は從來社會學に於て行はれたものと同一にして、而して其の特殊學への轉移は、一の新しき方法即ち實驗法の發達と結び附て居た。かくの如くにして成立せる實驗心理學は、確かに初めは、其の研究を單純な元素的な現象に限らねばならない偏局性を具有して居たが、併し今日では段々之を脱して來た。一方では記述心理學への發達が認められるが、尙は實驗心理學其の物の内部に於ても、近頃は實驗室の研究がより高等なる意識過程の研究に向けられて居る。更らに今日では大量觀察及び蒐集研究 (Massenbeobachtung und Sammelforschung) が發達して居る。

將來の社會學的特殊學が發達させる可き方法も亦、右に述べし特殊學としての心理學が發達させたものと同様に、構成されねばならないであらう。一方に於ては茲に現象の組織的觀察が肝要である。而して夫れはつまり吾人が偶然に與へられたる材料を以て満足せず、更に之を計畫的に探求することを意味する。此の場合に於ては大量觀察の方法が重要である。併し一部分實驗法も用ひらる可きである。更に又歴史的比較的方法が概念的基礎の上に構成され得る。夫れは歴史的及び土俗學的或は民族學的諸學科に於て貯藏されて居る豊富なる材料を、一定の社會學的問題に對して、社會學によりて夫れ夫れの目的の爲めに投せられたる概念網の助けを以て、研究す可き

ものである。

フィアカント氏は夫より其等の方法の性質を實例によりて明らかに説明する爲めに、結婚の問題、團體關係の性質に於ける人類の影響の問題、了解 (das Verstehen) の問題、團體精神の問題、指導的個人の問題、成功或は著名になること (Erfolge) の問題、文化轉訛 (Kulturvariante) の問題、文化變動 (Kulturwandel) の問題等の研究に於ける此等の方法の適用に就て述べて居る。又終りに社會學が特殊學として發達する爲めに、社會學會や社會學研究所の設立の必要なることを論じて居る。併し此處には此等の點に關する同氏の論述を紹介する暇がないから省略して置く。

以上述べ來りし處によりて知られる如く、本論文は社會學は社會形式を對象となし、經驗的に研究される特殊學であると云ふフィアカント氏の形式社會學の概念を、始めて簡明に論述せるものにして、此處に同氏の圓熟せる社會學概念の三要素中の始めの二要素は完成されて居る。而して第三の要素即ち現象學的方法を重要視する思想はまだ述べられて居ないが、しかも同氏が社會學の今後發達す可き途を既に大成して、社會學の發達の模範となる可きものと認める心理學の軌近の發達を説述する際に、現今の心理學に於ける記述心理學の方法の發達を述べて居ることは、或意味にては同氏が次に現象學的方法を重要視するに至る可き運命を指示するものと考へ得られ

る。此處に記述心理學と現象學との關係を詳論することは出來ないが、記述心理學は應用現象學の一種であると思ふことが出來れば（例へば Kracauer, *Soziologie als Wissenschaft*, 1922.）又記述心理學の立場から現象學を其の中に攝取することも出來るので（例へば Spranger, *Lebensformen*, 1921.）兩者の關係は甚だ親密である。而して兩者の關係を詳しく研究することは今日の文化科學或は精神科學の方法論上甚だ肝要なる問題である。併し此處に之を論ずることは出來ないが、とにかくフイアカント氏は社會學の研究上先づ記述心理學の重要なるを覺り、而して其の見解を精練せんとするに當て、現象學の思想に到達し、此處に現象學的方法を重要視する思想を確立するに至つたものと思はれる。